

催眠状態イメージと催眠態度との関連

筑波大学大学院(博)心理学研究科 清水 貴裕

筑波大学心理学系 小玉 正博

The relation between notions of hypnotic states and attitude toward hypnosis

Takahiro Shimizu (*Doctoral Program of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Masahiro Kodama (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to investigate people's 'notions of hypnotic states,' and to examine the relation between these and attitude toward hypnosis. A notions-of-hypnotic-states questionnaire of fifty-one items and an attitude-toward-hypnosis scale with six items were developed and administered to 333 college students. Factor analysis of the notions-of-hypnotic-states questionnaire yielded two factors: loss of subjectivity and released potentiality. Although no significant positive correlation was found between loss of subjectivity and attitude toward hypnosis, a low but significant positive correlation was found between released potentiality and attitude toward hypnosis. The relation between notions of hypnotic states and attitude toward hypnosis varied with gender and with attitude scale scores, suggesting that notions of hypnotic states are reflected in attitude toward hypnosis. Further research is needed into individual differences in hypnotic responses in terms of the hypnotized subjects' notions of hypnotic states.

Key words: Notions of Hypnotic States, Attitudes Toward Hypnosis

催眠研究における重要な課題の一つは、催眠反応における個人差を決定している要因を特定することである(Kirsch & Council, 1992)。本研究で述べる催眠反応とは、標準化された催眠感受性尺度を用いて測定される催眠暗示に対する顕在的・行動的反応(催眠行動)と催眠時に暗示されたことを体験したと報告する主観的体験(催眠体験)を指す。

古くから経験的に、被催眠者が催眠に対していかなる態度を持っているかによって、催眠誘導が容易であったり、困難になることが知られており(花沢, 1971)、催眠反応における個人差を規定する要因として、催眠に対する態度の研究がなされてきた。催眠に対する態度とは、催眠を「受けたい-受けたくない」あるいは「関心がある-関心がない」といった内容をあらわし、むしろ興味・関心に近い概念で

ある。

催眠に対して肯定的な態度(催眠を受けてみたい)を示す人は、催眠誘導および催眠暗示に対してより協力的であるため、催眠に対して否定的な態度(催眠を受けたくない)を示す人よりも暗示に対して反応しやすいものと推測される。多くの研究では被験者の示す催眠反応と態度の間に弱い、もしくは中程度の正の相関を見出している(Melei & Hilgard, 1964; Spanos, Brett, Menary & Cross, 1987; Yanchar & Johnson, 1981)。

Spanos et al.(1987)は、14項目から構成される催眠への態度尺度を作成し、因子分析によって催眠への態度を分析している。その結果、「催眠に対する肯定的な信念」、「催眠を精神的な安定性と関連づける信念の欠如」、「催眠への恐れの高さ」の3因子を

見出している。これら3因子の合計得点と催眠感受性得点は有意ではあるが低い相関($r = .28$)であった。また、この研究で作成された催眠に対する態度尺度を用いて、Kirsch, Silva, Comey & Reed (1995)も催眠感受性尺度との相関を調べており、 $r = .33$ の低い有意な相関を得ている。また、彼らはスペクトル分析という手法を用いて、各催眠暗示項目と態度の相関を調べており、「両手の運動」「手の硬直」「手の下降」といった比較的応答が容易な運動暗示項目と相関がある(それぞれ $r = .42$, $r = .29$, $r = .23$)ことを見いだしている。

このように催眠に対する態度と催眠感受性の間の相関は比較的一貫しており、有意ではあるが低いということは従来から指摘されており、Barber (1969)は、催眠という用語は言外に多くの意味を持っており、各被験者に正確に同じことを意味しないので、高い相関が得られないことは驚くに値しないと述べている。

またSpanos et al. (1987)は、催眠感受性得点と催眠への態度が直線的な関係にあるのではなく、逆U曲線分布になると説明している。つまり、催眠への態度が高ければ高いほど催眠感受性得点も高くなるわけではなく、催眠への態度の上昇とは反対に徐々に催眠感受性得点が減少していくことを示している。この結果について、Spanos et al. (1987)は、否定的な態度は催眠感受性を減少させているが、肯定的な態度と催眠感受性の関連については変動が大きく、それゆえに従来の研究では、態度と催眠感受性の間の直線的な相関が一貫して弱いものとなっていると述べている。

従来、態度は認知、感情、行動の3成分として捉えられることが多く、Spanos et al. (1987)の催眠への態度尺度もこの態度の3成分に従ったと考えられる。態度の3成分は一貫性があると広く認められてはいるが、西田(1988)は、認知的側面つまり態度対象に対する知識や信念は両面的なものであり、各個人によってその評価は異なると考えられるため、認知的側面と評価的側面は、その相互関係が明確でないならば別々に検討する必要があると指摘している。Spanos et al. (1987)の尺度では、例えば「深い催眠にかかった人はロボットのようになり、催眠者の暗示することには何でも自動的に従う」という質問項目があるが、この質問項目から催眠に対して好意的か非好意的かを判断するのは困難である。被催眠者の催眠に対する態度を適切に査定するためには、被催眠者が催眠状態についていかなる知識・信念を持ち、催眠を評価したか(好ましい-好ましくない)を査定することが必要になる。

以上のことから、催眠を「受けない-受けたくない」という評価的側面と、被催眠者が催眠をどのように認識しているかという認知的側面は別々に捉えて検討する必要があるものと考えられる。

臨床実践の中では、催眠に誘導する前に被催眠者に催眠についていかに捉えているかを尋ねることが多い。河野(1993)は、催眠療法を求めてきたクライエント8名に対して催眠を実施する前に、彼らが催眠をいかに捉えていたかを記述している。それによると、程度は様々であっても、全員が催眠を不思議な超常的、非日常的な体験であると回答したと報告している。催眠研究の中では、これまで、被催眠者が催眠を受ける以前に、催眠に対していかなるイメージを持っているかについてはあまり検討されてこなかった。小山・長谷川(1979)は、小学3年生から大学2年生までを対象に、催眠に対する意識調査を行っており、その結果、小学生では「不思議」「魔法のよう」「面白い」「楽しい」、中学生では「不思議」「こわい」、高校生・大学生では「不思議」「魔法のよう」が減少し、「面白い」「こわい」が増加すると報告している。この研究から、年齢を問わず人々が催眠に対して何らかの知識・信念を持ち、その感想を報告することが推察されるが、催眠状態をいかに捉えて報告しているかは不明である。

そこで本研究では、被催眠者の催眠状態に対して持っている知識や信念を催眠状態イメージと呼び、被催眠者がいかなる催眠状態イメージを有しているかについて、質問紙を用いて検討することを目的とする。催眠状態イメージを検討するにあたり、本研究では、催眠研究の上で「催眠誘導手続きを受けた結果としての状態」として定義されている手続き上区分された催眠状態にとどまらず、変性意識状態と呼ばれる広範な意識状態およびそのときの行動的応答に関する記述について収集して、催眠状態イメージに関する質問紙を作成し、個人が催眠状態イメージをいかに捉えているかについて探索的に検討する。

また、催眠状態イメージと催眠を「受けない-受けたくない」という催眠に対する態度の評価的側面との関連を検討するために、Spanos et al. (1987)の尺度から催眠に対する知識、信念を問う質問項目を除いた修正催眠態度尺度を作成し、催眠状態イメージおよび催眠態度との関連について検討する。

目 的

1. 催眠状態イメージ質問紙を作成し、個人の持つ催眠状態イメージについて探索的に検討する。

2. Spanos et al. (1987)の The Attitudes Towards Hypnosis Scale を修正して、修正催眠態度尺度を作成し、催眠状態イメージとの関連について検討する。

方 法

調査対象者 国立大学生333名(男性190名, 女性141名, 未記入2名)

尺度 修正催眠態度尺度: Spanos et al. (1987)の催眠に対する態度尺度を参考に、「自分が催眠を受けることへの関心」を表すような催眠を受けることについての感情的側面, 行動的側面を査定する尺度(修正催眠態度尺度)を作成した。具体的には, Spanos et al. (1987)の尺度から認知的側面を測定していると考えられる項目を省略し, 自分が催眠を受けることについての感情的, 行動的側面を捉えていると考えられる質問項目を加え, 催眠に対する態度を測定する上で, 内容的にも妥当であると判断された6項目とフィラー項目の合計13項目を作成した。各項目は, 「全く当てはまらない」から「よく当てはまる」の4件法で回答するよう求められた。

催眠状態イメージ質問紙: 本調査では, 被催眠者の

催眠反応に関する記述だけに限定せず, 変性意識状態と呼ばれる広範な意識状態およびそのときの行動的反応の特徴的記述に関して調査対象者に回答を求めることから催眠状態イメージについて検討することとした。そのため従来の催眠研究および解離, 至高体験などの研究(長谷川・飯塚, 1981; 笠井・井上, 1993; 成瀬, 1993; 齊藤, 1981, 1987; 坂入, 1991; 田辺, 1994; 吉成・長谷川, 1983)によって記述されている被験者の状態や質問紙から23カテゴリーを網羅的に収集し(Table 1), 各カテゴリーの状態を表していると考えられる質問項目を1カテゴリーにつき, 1または2項目, 研究者自身が作成するか, その質問紙から採用した。また, 予備調査として催眠を受けた経験のない人を対象に, 催眠にかかると思うかということについて自由記述を求め, 収集された記述の中からカテゴリーに含まれていないと考えられるものを質問項目として加えた。作成した質問項目は心理学専攻の大学院生3名によって内容の妥当性を吟味された。最終的に調査に用いられた質問項目は51項目となった。各質問項目について, 「そうなるとは思わない」から「そうなると思う」の4件法で回答するよう求められた。

調査手続き 大学講義時間に集団一斉調査で行われ

Table 1 催眠状態カテゴリーと各催眠状態の項目例

分類	質問項目の例
自発性の減少 イメージ 依存	自分から進んで行動しようという意欲がなくなる 普段よりも鮮明なイメージがわいてくる 催眠をかける人に言われることをすべて受け入れて, 自分で物事を判断しなくなる
時間感覚の喪失 言語感覚の喪失 非論理的, 非合理的 お任せ 自己責任感 選択的な注意集中 受動的注意 過去経験をイメージの世界で再生 健忘	催眠にかかっている間は時間が経つのが速く感じたり, 遅く感じる 言葉で表現できないほど心地好い状態になる 考え方が普段とは異なり, 論理的でなくなる 催眠をかける人を信用して自分の身をゆだねる 全ての決定を催眠をかける人にまかせる 催眠をかける人の声以外には気をとられなくなる 自分自身が努力して注意を集中しなくても, 自然に注意が集中する 幼い頃の出来事を今現在起こっていることのように鮮明に思い出す 催眠から覚めた後, 催眠中の出来事は忘れていく
心身のリラックス 解離体験 離人体験 身体感覚の喪失 空間感覚の喪失 主観客観差の感覚の喪失 恍惚感 被動感 自動感 解催眠後の状態 その他自由記述から	気持ちがゆったりとして落ち着く 自分自身がしている行動に気が付かなくなる 自分の身体が自分自身のものでなく感じる 身体の動きがぎこちなく, ゆっくりとなる 自分自身がどこにいるかわからなくなる 自分自身と他者の区別がつかなくなる 夢の中にいるような気持ちよい体験をするようになる 身体が自分以外の何かの力によって動かされているように感じる 自分で動かそうと思っていないのに身体が勝手に動くようになる 催眠から覚めても催眠をかける人に操られる 催眠にかかっている間は眠っているのと同じ状態になる

た。

調査時期 1999年8月～9月

結果と考察

(1) 催眠状態イメージ質問紙の因子分析

各項目の平均と標準偏差は Table 2 に示す。共通性の初期値を SMC とした主因子法プロマクス回転による因子分析により、2 因子が抽出された。その際、共通性の低かった 1 項目を除外して、最終的に分析した項目数は 50 項目となった。2 因子の累積寄与率は 64.3% であった。また、因子間の相関は $r = .39$ であった。回転後の因子パターンを Table 3 に示す。

回転後の因子パターンにおいて、絶対値 .40 以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心に、因子の解釈を行うことにした。

因子 I では、項目 15「催眠をかける人に言われることをすべて受け入れて、自分で物事を判断しなくなる」、項目 16「催眠をかける人に言われた通りの行動をする」など、催眠者の暗示に対して無批判に従う被催眠者の状態を表す項目と、項目 39「自分自身がしている行動に気がつかなくなる」、項目 45「自分自身をまるで別の人間のように感じる」など、自分自身がわからなくなってしまうというような被催眠者の自己喪失状態を表す項目から構成されている。これらの項目によって表される催眠状態のイメージは、斉藤(1981)が催眠状態を含めた変性意識状態の基本的特徴としてあげている空間・時間感覚の喪失、主観-客観の差の感覚の喪失、自己感覚の喪失といったカテゴリーを含んでいる。また、吉成・長谷川(1983)も催眠中の主観的体験を調べたとして、同様のカテゴリーを含んだ因子を見だし、「自己感覚喪失の因子」と命名している。こうしたことから、被催眠者が催眠状態になった場合には、被催眠者自身の主体性が失われ、結果として操られるという催眠状態イメージが個人にはあると考え、催眠状態に関する「主体性喪失イメージ」と命名した。

因子 II では、項目 40「普段よりも集中力が増す」、項目 41「普段よりも記憶力が良くなる」、項目 50「普段なら困難なこと(例えばスポーツや対人関係など)を成し遂げる」など、被催眠者が心理面、身体面ともに催眠状態では普段以上の能力を発揮することを表す項目で構成されている。また項目 19「幼い頃の出来事を今現在起こっていることのように鮮明に思い出す」や、項目 29「幼い頃の物の考え方や、行動に戻る」といった年齢退行現象を表す項目も因子 II

に含まれるが、これらは項目 13「普段よりも鮮明なイメージがわいてくる」や項目 21「忘れていた出来事を思い出す」といった普段と異なる能力の発揮による結果生じた状態として考えることが出来るであろう。催眠中にイメージ能力が高まる、あるいはイメージ能力の高い人が高い催眠感受性を持つという考えは、Tellegen & Atkinson(1974)の没入性や空想傾向(Lynn & Rhue, 1986)など広く催眠研究者の間にも持たれている。このように、これらの項目は因子 I に比較して被催眠者自身が催眠状態になると何らかの能力を発揮できるようになるイメージに関連していると考えて「潜在能力解放イメージ」と命名した。

(2) 催眠態度尺度の作成および催眠状態イメージとの関連

催眠に対する態度を査定するために使用する 6 項目の平均値と標準偏差を Table 4 に示す。6 項目が催眠に対する態度として、一次元であることを確認するために、主成分分析を行い、IT 相関を求めた。その結果得られた各項目の第 1 主成分への負荷量を Table 5、IT 相関の結果を Table 6 に示す。各項目に対する負荷量は若干低いものの、第 1 主成分の説明率が 49% と比較的高く、IT 相関からも比較的高い相関が得られたために、1 次元とみなした。また、Cronbach の α 係数では $\alpha = .79$ であった。

各催眠状態イメージ因子から因子負荷量の高かった 10 項目ずつを選び、催眠態度の相関を調べるのに用いた。各催眠状態イメージ 10 項目の α 係数は、主体性喪失イメージが $\alpha = .89$ 、潜在能力解放イメージが $\alpha = .86$ であった。相関を調べた結果、催眠態度と主体的喪失イメージ因子との間にはほとんど相関が見られなかった($r = .10$, $.05 < p < .10$) が、催眠態度と潜在能力解放イメージ因子の間には、弱い正の相関が見られた($r = .35$, $p < .01$)。この結果から、潜在能力解放イメージを持っている人ほど、催眠を受けることに対して肯定的な態度を持つ傾向が高いことが示唆された。

Spanos et al. (1987)をはじめとする、従来の催眠に対する態度の研究では、催眠態度と催眠反応の間の関係に性差があることを報告していることが多く、催眠状態イメージについても男女で捉え方が異なることが推測される。男女別に各催眠状態イメージと催眠態度の相関を調べた結果、男性では催眠態度と主体性喪失イメージ($r = .15$, $p < .05$)、潜在能力解放イメージ($r = .32$, $p < .01$)それぞれとの間に弱い正の相関が見られた。また、女性では催眠態度と主体性喪失イメージとの間には相関が見られず

Table 2 催眠状態質問紙の各項目平均得点および標準偏差

項目	平均	標準偏差
1 自分から進んで行動しようという意欲がなくなる	2.67	0.89
*2 催眠から覚めても、催眠をかける人に操られる	1.79	0.79
3 隠して人には言えないことを催眠をかける人に話す	3.09	0.83
4 想像の世界に熱中して、現実の出来事のように感じる	2.75	0.89
5 普段は気づかない感情が表れる	3.14	0.82
6 自分と周囲のものが一体になったように感じる	2.05	0.80
7 催眠にかかっている間は時間が経つのが速く感じたり、遅く感じる	2.64	0.92
8 催眠にかかっている間は眠っているのと同じ状態になる	2.60	0.90
9 話し方がごちなく、ゆっくりとなる	2.41	0.85
10 自分の身体が自分自身のものではなく感じる	2.70	0.89
11 現実の世界と想像の世界の区別がつかなくなる	2.60	0.90
12 催眠をかける人の言うことに抵抗しようと思わなくなる	3.05	0.85
13 普段よりも鮮明なイメージがわいてくる	2.38	0.85
14 全ての決定を催眠をかける人にまかせる	2.55	0.90
15 催眠をかける人に言われることをすべて受け入れて、自分で物事を判断しなくなる	2.54	0.88
16 催眠をかける人に言われたとおりの行動をする	3.00	0.82
17 自分自身が努力して注意を集中しなくても、自然に注意が集中する	2.29	0.85
18 言葉で表現できないほど心地よい状態になる	2.47	0.88
19 幼い頃の出来事を今現在起こっていることのように鮮明に思い出す	2.63	0.87
20 身体が自分以外の何かの力によって動かされているように感じる	2.89	0.84
21 忘れていた出来事を思い出す	2.86	0.87
22 催眠をかける人を信用して自分の身をゆだねる	2.73	0.88
23 自分自身の責任を放棄するようになる	2.29	0.84
24 催眠から覚めた後、催眠にかかっている間の出来事を忘れる	2.63	0.96
25 催眠をかける人の声以外には気をとられなくなる	2.70	0.90
26 催眠にかかっている間は時間がとまっているように感じる	2.37	0.86
27 普段、自分がやりたくないと思っていることを無理矢理にやらされる	2.39	0.89
28 身体の筋肉の緊張がとれる	2.73	0.86
29 幼い頃の物の考え方や、行動に戻る	2.44	0.87
30 自分の身体に何かがのりうつったような状態になる	2.48	0.87
31 考え方が普段とは異なり、論理的ではなくなる	2.50	0.83
32 他人を見ているように自分自身を眺めていると感じる	2.32	0.85
33 聞こえないはずの音が聞こえたり、見えるはずのものが見えなくなる	2.32	0.88
34 眠っている時に夢をみるのと同じように、催眠にかかっている間に夢を見る	2.38	0.85
35 自分自身がどこにいるかわからなくなる	2.42	0.89
36 普段よりも身体能力（足が速くなる、力が強くなるなど）が上がる	2.22	0.94
37 催眠にかかっている間は他の関係のない事柄に気をとられなくなる	2.82	0.88
38 うっとりとして、何もしたくなくなる	2.43	0.85
39 自分自身がしている行動に気がつかなくなる	2.58	0.91
40 普段より集中力が増す	2.25	0.88
41 普段よりも記憶力がよくなる	2.04	0.86
42 自分で動かそうと思っていないのに身体が勝手に動くようになる	2.76	0.88
43 身体の動きがごちなく、ゆっくりとなる	2.38	0.84
44 身体に針を刺されたり、火を近づけられても何も感じなくなる	1.96	0.89
45 自分自身をまるで別の人間のように感じる	2.22	0.85
46 自分自身と他者の区別がつかなくなる	1.92	0.75
47 気持ちがゆったりとして落ち着く	2.69	0.83
48 催眠をかける人に対して嘘をつけなくなる	2.91	0.90
49 夢の中にいるような気持ちよい体験をするようになる	2.62	0.81
50 普段なら困難なこと（例えばスポーツや対人関係など）を成し遂げる	2.36	0.96
51 催眠にかかった人が催眠から覚めた後で、自分でなぜそうしたかわからない行動をとる	2.68	0.94

*は除外項目

Table 3 プロマクス回転後の因子パターン

項目	因子 I	因子 II	共通性
15 催眠をかける人に言われることをすべて受け入れて、自分で物事を判断しなくなる	0.77	-0.28	0.51
16 催眠をかける人に言われたとおりの行動をする	0.72	-0.09	0.47
14 全ての決定を催眠をかける人にまかせる	0.71	-0.15	0.44
39 自分自身がしている行動に気がつかなくなる	0.66	-0.04	0.41
12 催眠をかける人の言うことに抵抗しようと思わなくなる	0.65	-0.03	0.41
24 催眠から覚めた後、催眠にかかっている間の出来事を忘れる	0.62	-0.12	0.34
48 催眠をかける人に対して嘘をつけなくなる	0.62	-0.02	0.37
45 自分自身をまるで別の人間のように感じる	0.59	0.07	0.38
31 考え方が普段とは異なり、論理的ではなくなる	0.58	0.02	0.35
42 自分で動かさそうと思っていないのに身体が勝手に動くようになる	0.56	0.07	0.35
27 普段、自分がやりたくないと思っていることを無理矢理にやらされる	0.55	-0.14	0.27
25 催眠をかける人の声以外には気をとられなくなる	0.55	0.08	0.34
1 自分から進んで行動しようという意欲がなくなる	0.52	-0.04	0.26
22 催眠をかける人を信用して自分の身をゆだねる	0.52	0.16	0.36
38 うっとりとして、何もしたくなくなる	0.51	0.16	0.35
23 自分自身の責任を放棄するようになる	0.51	0.03	0.28
43 身体の動きがぎこちなく、ゆっくりとなる	0.50	0.13	0.32
35 自分自身がどこにいるかわからなくなる	0.50	0.14	0.33
37 催眠にかかっている間は他の関係のない事柄に気をとられなくなる	0.50	0.20	0.36
10 自分の身体が自分自身のものではなく感じる	0.48	0.07	0.26
51 催眠にかかった人が催眠から覚めた後で、自分でなぜそうしたかわからない行動をとる	0.47	-0.02	0.22
20 身体が自分以外の何かの力によって動かされているように感じる	0.45	0.19	0.31
30 自分の身体に何かのりうつったような状態になる	0.45	0.27	0.37
8 催眠にかかっている間は眠っているのと同じ状態になる	0.44	-0.04	0.18
11 現実の世界と想像の世界の区別がつかなくなる	0.40	0.25	0.30
3 隠していて人には言えないことを催眠をかける人に話す	0.40	0.03	0.17
46 自分自身と他者の区別がつかなくなる	0.39	0.17	0.24
26 催眠にかかっている間は時間がとまっているように感じる	0.38	0.25	0.29
9 話し方がぎこちなく、ゆっくりとなる	0.36	0.15	0.20
34 眠っている時に夢をみるのと同じように、催眠にかかっている間に夢を見る	0.32	0.24	0.23
4 想像の世界に熱中して、現実の出来事のように感じる	0.28	0.25	0.20
44 身体に針を刺されたり、火を近づけられても何も感じなくなる	0.26	0.22	0.16
40 普段より集中力が増す	-0.23	0.79	0.54
41 普段よりも記憶力がよくなる	-0.14	0.69	0.42
19 幼い頃の出来事を今現在起こっていることのように鮮明に思い出す	-0.06	0.64	0.39
17 自分自身が努力して注意を集中しなくても、自然に注意が集中する	0.01	0.61	0.38
13 普段よりも鮮明なイメージがわいてくる	0.01	0.61	0.37
47 気持ちがゆったりとして落ち着く	0.10	0.60	0.41
29 幼い頃の物の考え方や、行動に戻る	0.15	0.59	0.44
50 普段なら困難なこと(例えばスポーツや対人関係など)を成し遂げる	-0.05	0.58	0.31
28 身体の筋肉の緊張がとれる	0.02	0.53	0.29
21 忘れていた出来事を思い出す	-0.07	0.53	0.26
18 言葉で表現できないほど心地よい状態になる	0.16	0.53	0.37
36 普段よりも身体能力(足が速くなる、力が強くなるなど)が上がる	-0.08	0.48	0.20
49 夢の中にいるような気持ちよい体験をするようになる	0.34	0.44	0.42
7 催眠にかかっている間は時間が経つのが速く感じたり、遅く感じる	0.15	0.41	0.24
6 自分と周囲のものが一体になったように感じる	0.27	0.34	0.26
32 他人を見ているように自分自身を眺めていると感じる	0.28	0.32	0.25
5 普段は気づかない感情が表れる	0.22	0.31	0.20
33 聞こえないはずの音が聞こえたり、見えるはずのものが見えなくなる	0.26	0.27	0.20
説明分散	9.46	6.51	15.96

Table 4 修正催眠態度尺度項目の平均と標準偏差

項目	平均	標準偏差
4 私は機会があれば催眠をかけられてみたい	2.70	1.13
11 私は自分が催眠にかかるかどうかを知りたい	2.93	1.04
14 私は自分が催眠にかかるということを人に知られてもかまわない	2.85	1.03
19 私は自分が催眠にかかることを怖いと思わない	2.65	0.92
6 催眠にかかる面白くことが起こると思う	2.66	0.97
7 自分が催眠をかけられるのは嫌だ	2.50	1.12

Table 5 修正催眠態度尺度の主成分分析の結果

項目内容	負荷量
4 私は機会があれば催眠をかけられてみたい	0.51
11 私は自分が催眠にかかるかどうか知りたい	0.45
14 私は自分が催眠にかかるということを人に知られてもかまわない	0.34
19 私は自分が催眠にかかることを恐いと思わない	0.33
6 催眠にかかる面白くことが起こると思う	0.33
- 7 自分が催眠をかけられるのは嫌だ*	-0.46
固有値	2.92
説明率	0.49

*は逆転項目

Table 6 修正催眠態度尺度のIT相関

項目内容	IT相関
4 私は機会があれば催眠をかけられてみたい	0.72
11 私は自分が催眠にかかるかどうか知りたい	0.60
14 私は自分が催眠にかかるということを人に知られてもかまわない	0.43
19 私は自分が催眠にかかることを恐いと思わない	0.42
6 催眠にかかる面白くことが起こると思う	0.39
- 7 自分が催眠をかけられるのは嫌だ*	0.63

*は逆転項目

($r = .001, p > .10$), 潜在能力解放イメージとの間には弱い正の相関が見られた($r = .39, p < .01$). 以上のことから, 男女ともに潜在能力解放イメージは, 催眠を受けることに対する肯定的な態度に反映されている傾向があり, 一方, 主体性喪失イメージに関しては, 男性で若干相関はみられるものの, 催眠を受けることに対する肯定的な態度には必ずしも反映されないことがわかる.

また, 催眠態度を平均値で高得点群と低得点群に分け, 催眠態度と各催眠状態イメージ因子との相関を調べた結果, 高得点群では各催眠状態イメージと催眠に対する態度の間で相関が見られなかった(主体性喪失イメージ $r = .08, p > .10$, 潜在能力解放イメージ $r = .09, p > .10$)⁸, 低得点群では主体性喪失イメージ因子, 潜在能力解放イメージ因子それ

ぞれと弱い正の相関が得られた(それぞれ $r = .23, p < .01, r = .32, p < .01$). つまり, 低得点群では主体性喪失イメージ, 潜在能力解放イメージそれぞれが高いほど催眠を受けることに肯定的になる.

以上のことから, 全体的に, 催眠中には「記憶力が良くなる」「イメージが鮮明になる」といった被催眠者の能力が高まるというイメージを示す潜在能力解放イメージ因子得点の高さは, 催眠を受けることに対する肯定的な態度と関連があり, 「催眠者に操られる」「自分自身を失ってしまう」といったイメージである主体性喪失イメージは催眠を受けることに対する肯定的な態度とは相関が見られないことがわかった. 催眠態度の高得点群・低得点群で比較した結果から検討すると, 低得点群では主体性喪失イメージと催眠態度の間にも弱い正の相関が見られ,

高得点群になると相関がなくなり、全体として相関がなくなっている。このことから、全体的に主体性喪失イメージと催眠態度の間に相関が得られなかったことは、関連がないというよりむしろ、催眠を受けることに対する肯定的な態度が高い人の中では、主体性喪失イメージが肯定的な態度、否定的な態度両方と結びついているためと考えられる。

また、催眠態度の高得点群と低得点群の比較では、高得点群が両方の催眠状態イメージとほとんど相関がなく、各催眠状態イメージが両価的な態度評価を受けている一方で、低得点群は肯定的態度と両方の催眠状態イメージとの間に正の相関を持っており、催眠状態全般に漠然と関心を抱いていることがわかる。このことは、Spanos et al. (1987)が催眠への態度が高くなるにつれて、催眠感受性との相関が低くなると述べていることと併せて考えると、催眠に対する態度が高いほど催眠状態イメージが分化し、それが催眠感受性に影響を与えているためと考えられるのではないだろうか。同様に、本研究で得られた男女間での催眠状態イメージの違いも催眠態度、および催眠反応に影響を与えている可能性があり、これまで単に性差があるとして捉えられてきた男女の催眠反応の違いを、男女の催眠状態に対するイメージの違いとして再検討する必要がある。

主体性喪失イメージは、従来催眠家の間で指摘されてきたように、催眠者に操られ、被催眠者自身が全くコントロールを失ってしまうという一般的な催眠状態に対する認識に近い。小山ら(1979)が考察しているように、マスメディアから得られる知識もこうした主体性喪失イメージに近い知識であると考えられる。こうした一般的な知識に近い主体性喪失イメージについて、催眠態度高得点群と低得点群、あるいは男女の間で違いが見られるのは何を意味しているのだろうか。西田(1988)は、ピラミッド・システムを大まかに「知識」「ステレオタイプ」「信仰」などに分類し、その中でも「知識」はもっとも周辺のピラミッドであり、変化しやすいとしている。このことを考慮すると、主体性喪失イメージ、潜在能力解放イメージに関しても、マスメディアなどから得た変化しやすい周辺の情報からなるイメージと、より中心的な信念や期待からなるイメージに区分してさらに検討する余地があると思われる。主体的喪失イメージは、比較的一般に持たれやすい催眠状態に関する知識を含んでいると考えられ、そうした催眠状態イメージを持たない、あるいは持っても潜在能力解放イメージの方が強い人々では、単なる知識以上の信念や期待を持っており、それが催眠状態イメージに反映されている可能性もある。また、そ

うした知識や信念が催眠を受けることでいかに変化していくのかについても検討する必要があるだろう。今後、催眠状態イメージについてさらに詳細に検討し、それがいかに催眠反応に反映されているかを捉えることは、催眠反応における個人差を検討していく上で、一つの観点を提出するものと考えられる。

引用文献

- バーバー・T. X. 成瀬悟策(監修) 1969 催眠 誠心書房。(Barber, T.X. Hypnosis. New York: Van Nostrand Reinhold Company.)
- 長谷川浩一・飯塚伸一 1981 類催眠経験と人格に関する数量的検討 催眠学研究, 26, 1-6.
- 花沢成一 1971 催眠と態度 金子仁郎 成瀬悟策(編)催眠学講座第3巻 基礎研究 東京:黎明書房 Pp.299-305.
- 笠井 仁・井上忠典 1993 想像活動への関与に関する研究:測定尺度の作成と妥当性の検討 催眠学研究, 38, 9-20.
- Kirsch, I. & Council, J.R. 1992 Situational and personality correlates of hypnotic responsiveness. In Fromm, E. & Nash, M.R. (Eds.) Contemporary Hypnosis Research New York: The Guilford Press. Pp.267-291.
- Kirsch, I., Silva, C.E., Comey, G. & Reed, S. 1995 A spectral analysis of cognitive and personality variables in hypnosis: Empirical disconfirmation of the two-factor model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 167-175.
- 河野良和 1993 催眠下の意識体験 催眠学研究, 38, 28-41.
- 小山 望, 長谷川 浩一 1979 催眠に対する意識調査-発達心理学的視点から-催眠学研究, 24 (1), 35-37
- Lynn, S.J. & Rhue, J. W. 1986 A fantasy-Prone-Person: Hypnosis, imagination, and creativity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 404-408.
- Melei, J.P. & Hilgard, E.R 1964 Attitudes toward hypnosis, self-predictions, and hypnotic susceptibility. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, 2, 99-108.
- 成瀬悟策 1993 催眠理論の再構築. 催眠学研究 38, 27-41.
- 西田公昭 1988 所信の形成と変化の機制についての研究(1) -認知的矛盾の解決に及ぼす現実性の効

- 果—Japanese Journal of Experimental Social Psychology, **28**, 65-71.
- 斎藤稔正 1981 変性意識状態(ASC)に関する研究
松籟社
- 斎藤稔正 1987 催眠法の実際 創元社
- 坂入洋右 1991 至高体験—その特徴と試行体験者の精神的健康度— 催眠学研究, **36**, 35-43.
- Spanos, N.P. Brett, P.J. Menary, E.P. & Cross, W.P. 1987 A measure of attitudes towards hypnosis: Relationships with absorption and hypnotic susceptibility. *American Journal of Clinical Hypnosis*, **30**, 139-150.
- 田辺 肇 1994 解離性体験と心的外傷体験との関連—日本版 DES (Dissociative Experience Scale) の構成概念妥当性の検討—催眠学研究, **39**, 1-2.
- Tellegen, A. & Atkinson, G. 1974 Openness to absorbing and self-altering experiences ("absorption"), a trait related to hypnotic susceptibility. *Journal of Abnormal Psychology*, **83**, 268-277.
- Yanchar R.J. & Johnson H.J. 1981 Absorption and Attitude towards Hypnosis: A moderator analysis. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, **24**, 375-382.
- 吉成 淳・長谷川浩一 1983 催眠中の主観的体験に関する研究—他者催眠と自己催眠の比較— 催眠学研究, **28**, 1-9.
- 2000. 9. 29 受稿—